■魚谷常吉　　料理研究著述家。包丁のワザと著述のワザともに際立ったが，世間から離れるべく出家するも，自死に至る。
うおやつねきち
日清戦争始・1894＝　　神戸の長田神社の近くで，料亭｛西魚膳｝を経営する魚谷家に生まれる。幼名は昇。

日比谷公園・1903＝ 9歳：

日露戦争終・1905＝11歳：

のちの著作には，丹念に地方の味と料理法を綴っていることから，若くして，修業に出，遍歴をを繰り返して，腕を磨くだけでなく，土地の人と会話を重ねることで，語りの方も磨かれていったようで，

明治天皇没・1912＝18歳：

原敬首相暗殺1921＝27歳：

父が死去して家督を継ぎ，代々同様，名を常吉と改めた時には，一流の料理人になっており，宗関と号する茶人としても知られるようになった。

海軍軍縮条約1930＝36歳：
満州事変・・1931＝37歳：

世相の変化に加え，相次ぐ妻子の死が直接の動機になったらしく，

芥川直木賞始1935＝41歳：*料理本の著作に乗り出し，最初に河原書店から出版された著作「茶料理」には，｛茶道月報｝主幹井口海仙の序文がついていて，京都の書店主が原稿をもって相談に来たが，一読感服して出版を勧めたというほど，達意，洒脱な文章と，料理人としての確かな眼識で，続く「滋味風土記」「四季酒の肴」以降は，
二二六事件・1936＝42歳：｛茶道｝懐石篇の「茶料理の時代色」には，武者小路千家家元，裏千家家元，八百善の栗山善四郎，北大路魯山人，藤原銀次郎といった錚々たるメンバーに伍して，一文を寄せていることからも，並みの料理人とはひと味ちがう評価を受けていたことがうかがえる覗える。*「茶懐石」「僧房の料理」を除いて，「魚料理」「きのこ料理」「精進料理」「長寿料理」「料理読本」「野鳥料理」「味覚法楽」，
日中戦争始・1937＝43歳：*「郷土風味」「ちん味百選」まで，全て秋豊園出版部から，立て続けに出版すると，店を畳んで，上品寺で出家。以後，本の出版は皆無となる。和歌山県西牟婁郡すさみ町の大仙寺で仏道修行に励み，
健保+総動員　1938＝44歳：_料理と味覚について，思い出すまま，縦横に語り綴って，とくに好評だった「味覚法楽」の新装版が刊行され，この書からは，謹厳に見えるも，酸いも甘いも噛み分けた粋人で，皮肉屋の一面を持つユーモリストでもあることが分かるも，もはや関係無く，
第二次大戦始1939＝45歳：
大政翼賛会・1940＝46歳：_和歌山県の貧乏寺宝光寺に入って，
日米開戦・・1941＝47歳：_住職となり，
敗戦・・・・1945＝51歳：
極東裁判決・1948＝54歳：
独立回復・・1951＝57歳：
_世相を黙殺するように，庭づくりに没頭していたらしいが，

なべ底不況・1957＝63歳：

安保闘争・・1960＝66歳：
_晩年，金銭上のトラブルがもとで，檀家の人たちとの間に軋轢を生ずるも，弁解もせずにいるうち，彼らの不満は増幅し，反目するに至るとともに，持病の高血圧も，血圧は220以上を記録するほど進行し，

東京ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ 1964＝70歳：_意を決したように，鴨居に電気コードを通し，縊死した。未刊の原稿「下手物」が遺されていた。
晩年の愛読書は，さすがに禅仏教に関するものが多く，そのほか，自著は全部初版本が遺っているほか，哲学，心理学関係，医書では高血圧に関するものが，かなりの部数あった。

平野雅章編「味覚法楽」あとがき，